

コンコーネ25番の歌唱法

著者	田中 千義, 森 恭子
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 人文科学
巻	45
ページ	33-41
発行年	1996-12-10
その他の言語のタイトル	A Singing Method for Concone No,25
URL	http://hdl.handle.net/2298/1055

コンコーネ 25 番の歌唱法

田中千義・森 恭子

A Singing Method for Concone No. 25

Chiyoishi TANAKA and Kyoko MORI

(Received September 2, 1996)

はじめに

コンコーネ 25 番の教本は, コンコーネ 50 番を練習した後で, 更に声楽技術を進歩発展させていくためのものである。他に 40 番, 30 番, 15 番があるが, 50 番の後は 25 番を用いるのが一般的である。50 番中声用から 25 番中声用に進もうとして, 先ず気付くのは音域の広さである。第一曲目 12 小節目に G 音が現れ 15 小節目に再度出現する。最初の G 音は, 下の C 音から順次上昇して来て音階練習のように実に自然に導びかれるので歌い易いが, 二度目の G 音は B 音から 6 度跳躍して歌わねばならない。歌う前によく発声練習をして咽喉の状態を柔軟で, しかも力強く支えのある声にしておかねばならない。普段の発声練習を大切にしたい。

大部分の男性は, 上の G 音を出すと声に疲れを覚え, 声がかすれるか割れるかまたはひっくり返り裏声になってしまう。困難かつみじめな思いをする発声練習ではあるが, 数ヶ月, 半年, 一年を一区間と思い, 根気よく練習を積み重ねねばならない。

曲が進むにつれ声の技巧的困難な箇所が出て来るが, その周辺数小節を取り出して, 休まずに数回繰り返す練習方法を取る。練習時間の節約と声帯の鍛錬を確実なものにする為である。以下は一曲ずつの解説である。

1 先ず第一曲は 50 番の曲に較べどのように曲想が変化しているか伴奏を弾いて確かめる。ゆったり流れる 3 連符の伴奏に乗りおだやかな気分で歌い出したい。10 小節目 3 拍目の休符は高い声のポジションを取る準備の貴重な時間なので, 特に入念に呼吸をする。G 音になる直前では遅いので, 11 小節目の C 音で支えの態勢をすでにとっておく。15 小節目の G 音は少し長目に歌わねばならない。ここは最大の難所なので何回も繰り返し練習する。17 小節目からまたドルチェにして 21 小節目の 32 分音符はフォルテだが柔らかくはずんで歌う。26 小節目の 32 分音符も同様である。終わりの高い F 音はフォルテからピアノにディミヌエンドするのは大へん難しい。咽喉に力が入り過ぎないように, しかし程よく横隔膜の支えを意識して歌う。過度に咽喉が緊張してしまうといわゆるのど声になってしまうので特に男性は首を少し動かしながら練習する。また両手を横隔膜の下側に軽く置いて支えを感じながら歌う。初めての曲だが, しっかりと曲の感じを出すように, また歌詞の付いた歌曲と違ってしっかりと歌う。曲の途中の注意事項をよく守って練習する。二曲目からは更に深く注意していろいろな技術を学んでゆかねばならないので, 先ずは第一曲目を確実に練習しておく事が肝要である。

2 この曲の1, 5, 9, 13, 15小節目のアクセントは、それぞれその小節を取り出して、繰り返し歌う。横隔膜をよくよく意識して一音ずつ音程がはずれないようにテンポは遅く取る。上のE音を出す時、声が力み過ぎて堅くならないように注意して繰り返し歌う。16分休符の後16分音符が何回も出て来るが、軽く正確にとれるように、これも取り出して繰り返し歌う。15小節の下のC音は、地声或いは生の声になり易いので、声の艶を失わないように声の響きを確かめながら歌う。17小節目からドルチェなので横隔膜の支えを力み過ぎないようにしながらF音、23小節目のG音を歌う。この23小節目は難所である。堅いG音にならないつややかな声が出るように何度も練習したい。25小節目からハ長調で静かな平穏な感じ、そして27小節目の旋律はやさしさにみちた色あいの声を出しながら歌うとよい。只の旋律と決して思わない方がよい。心に安らぎさえ覚える箇所である。また1番と同様に伴奏の音で、心の緊張感、安らぎ、転調の美しさを喜びを持って感じる感性が欲しい。多くの音楽に接して感性をいよいよ高めてもらいたい。美しい歌詞のないメロディはなんの情念もなしに心慰められるものである。練習者がこのように感じつつ練習する事を強く望むものである。単なる練習曲と思ってはならない。

3 発想標語は「優雅に」である。数小節伴奏を弾いてみて、心はずむ気持ちで歌う事を予感する。旋律の1拍目前半のスタッカートの後すぐに呼吸を少しとり次のアクセントの音をすぐ落ち着くような感じで歌い、次にまた同じ様に進むのであるが、少し高い音なので横隔膜を意識して咽喉に力が入らないように気を付ける。アクセント記号の付いた音が次々に現れるので、横隔膜の鍛錬と思って腹部に手を軽く置いて意識しながら練習するとよい。曲の後半は16分音符の練習である。初めはテンポをゆっくり取り音程を正確にするよう努力する。次に一音ずつ母音またはma, mo, me, mi等を使い、更に正確な音程づくりをする。エレガントの記号の付いた小節は急速に下行上行するので、少し工夫して1拍目をディミヌエンド、2拍目をまたディミヌエンドとし、頭のF音とC音それぞれを少し大きめの声で歌う。エレガントから4小節過ぎた辺りからアクセントがまた現れるが、強過ぎるとエレガントではなくなるので、注意して軽く付ける。ハ長調に移ってソットボーチェになるが、初めは普通のボリュームで音をとっていく。16分音符の4つずつの動きがよりなめらかになるように一小節ずつ取り出して細かく練習を重ねる。音はずしそうな気がする時は、伴奏音はさて置いて旋律をピアノで一音一音確かめながらいねいに歌う。2番の曲に較べてはるかに難しいので更に多くの練習が必要であろう。上のG音の音符の下にはドルチェと書いてある。柔らかいフォルテでG音だけの練習をしてから後旋律を歌う。柔らかいフォルテのアクセントは甘い旋律の歌曲の中から参考にしよう。レコード、CD、LDで沢山の歌手の歌い方を学ぶとよい。

4 オペラの中のアリアのような曲である。感情を込めて歌いたい。5, 6小節目の最後の音はていねいに歌う。ぶっきらぼうな歌い方にならないように、17小節目から明るいストーリーに転じたと思って朗朗と流れるように歌う。長調の終わり上のE音を6拍延ばす時、横隔膜を上手に支えディミヌエンドするが、スタミナを温存しておかないと難しい。G音F音の延長でへこたれないように声帯、呼吸の鍛錬を常日頃心掛けておくとよい。エスプレッシーボから伴奏の和音の素晴らしさに浸り喜びを感じながら歌う感性が欲しい。上のC音の前短打音は、横隔膜の支えと共に咽喉の適度の緊張をもって、思い切りよく瞬間的音の移動を行う。練習の初めはゆっくりしたテンポで歌い、徐々にテンポを速くした練習を重ね鮮やかに機敏に歌えるようにする。3番4番と曲が進むにつれ、繰り返し記号のために歌う時間が長くなっている。声のスタミナの配分に気を付

けたい。例えばこの4番の後半エスプレッシーボからは、軽く流しながら歌うとよい。これは繰り返し歌う事によって自然に要領が得られる筈である。

5 伴奏を少し弾いて感じるのは楽しさである。トランキエーロであれば控え目な楽しさを持ったものであろう。3小節の旋律は正に明るい感じを持つ。16小節目の高いE音は弱く歌わねばならないが、息の終わりで苦しいが横隔膜の支えを大事にのど声にならないように歌う。19、20小節目の練習は初めはゆっくり音程を正確にとり、声の支えを意識しながら咽喉を柔らかく保ちながら歌う。徐々に速いテンポにして練習を重ねる。高いE音のフェルマータから下のE音に下降する歌い方は、軽いポルタメントを掛けて降りてくる。曲想から考えてゆっくりしたポルタメントは考えられない。曲想を損なわないように早目のしかも上品なポルタメントを掛け、もとの旋律にもどすのである。ポルタメントを過ぎて前の旋律のバリエーションが現れるがこれは軽くはむむように歌う。この旋律の終わりに高いA音が待っている。ここでは前の小節からこのA音に向かう歌い方を繰り返し練習してA音を征服せねばならない。ピアノと指定されているが、初めは普通かフォルテで練習し高いポジションにうまく声を当てるように練習せねばならない。人によってはメゾ・フォルテ位の声量で歌っておくとよい。二長調になってから6、7、8小節目は注意を要する。高いG音を出した後中音域へのポジションの移動を素早くなめらかにしたい。高い声を出した時の咽喉の緊張をやや和らげる為横隔膜の支えを少しゆるめる。ゆるめ過ぎると付点音符のはずんだ声が不安定になる。レジェーロから4小節は特に多く練習する。音程を確かなものにする為にmaで一音ずつゆっくり取り、16分音符4つの動きと次のスタッカートの音だけ、または4つの16分音符と次の4分音符だけ練習する。この時ピアノは旋律を声と共に弾く。咽喉の柔軟さを要求されているので、よく身体全体を意識してはずみを付けたように軽快に歌えるまで練習する。4番と同様にこの曲も長いので、スタミナの配分を考え、力を抜くところは抜いて流すように歌い疲れないように注意する。

6 平凡な伴奏ではあるが、旋律にはグラツィオーソとある。4小節歌ってみてなるほどと感じる事が肝要である。最初に出る前短打音は咽喉のコントロールを軽い緊張のうちに上手にやりたい。次の2拍目のアクセントは軽く力を加えそのエネルギーの余力で次のF音に跳躍する。この初めの2小節をきれいに歌えるように先ず練習する。3、4小節目は高いG音に向かって勢いよく昇っていく。G音のディミヌエンドを忘れないように。6、7小節目の16分音符4つはなめらかに歌えるように、また音程が滑ってはっきりしない旋律にならないように注意しながら練習する。13、14、15小節目のスタッカートの後は横隔膜の支えによって息を瞬間的に止めるように練習する。16小節目から17小節目へのC音はあわてず少しゆっくりずり上げるポルタメントで軽快な感じに歌ってもとの旋律にもどっていく。下のC音が次のきれいな頭声を予感するような柔らかい声であるように歌いたい。押しつけたような胸声ではいけない。エスプレッシーボからは曲想が変わる。よく伴奏の音を聴き和音の変化をよく掴むとよい。コン・アバンドーノからは自由なテンポ感で奔放に歌う。ラルガメンテの次に小さい音符で高いB音が出て来る。頭声のポジションによく当たるように2拍分だけ取り出して練習する。横隔膜の支えで声を出す。咽喉のみのコントロールでは本物の声にならない。終わりの9小節分の旋律は気持ちを沈静させるつもりで楽に流す感じに歌う。

7 2小節分の前奏でバレー音楽かと思ってしまう。楽しい気分で歌える。前短打音を軽く歌った

後次の拍はアクセントである。このアクセントの時前短打音を歌っただけで余っているエネルギーをぶつけられるので丁度歌い易い。グラツィオーソなので横隔膜の支えが強過ぎないように。変ホ長調の前14小節分は自由な感じで歌う。転調してから5小節目のG音の1オクターブ上昇は頭声へのチェンジを何回も練習して、なめらかな歌声を作るよう練習する。

8 1小節目からオクターブの上昇が出て来るので、歌い出す前からオクターブ跳躍のことを考えて横隔膜の支えを準備しておく。エレガントから8小節の間は、16分音符の速い動きに加え半音階を機敏に歌わねばならない。更に1オクターブ以上の声のコントロールを自由に行わねばならない。発声練習の段階でオクターブを自由に上下する旋律を歌っておく。その曲に合った発声の準備をしておくのは大事なことである。アニマンドからは高いB音を目標に咽喉を充分に開いてB音を発する直前にHの子音の声を交えながら声を出す。特に男性に有効な方法である。オペラ歌手の高い声の発し方を参考にするとよい。ア・テンポ以後は心のゆとりを感じさせるような、情感の漂う歌い方を練習する。終わりの4小節分はゆったりと落ち着いた声でいねいに歌い終わる。全体を通じてまじめで甘い感じが流れていれば、この曲に示されたセンチメンターレ、ドルチェ、エレガント等の作曲者の意が具現された事になる。それぞれの声楽的テクニックは半年、一年、数年の長い時間を単位と考えねばならない。数回の練習で通り過ぎるような教材ではない。後でふり返っているいろいろな曲を繰り返し歌い、多くの技術を磨き自分のものにして欲しいと思う。

9 なんと沈んだ静かな感じの伴奏だろう。この音に乗って静かに音を追って行こう。メッサ・ボーチェは中音域のところなので自然に声がそうなるだろう。すでに九曲目である。コンコーネの作曲りに譜読みの段階で直ちに感応する感性を持ちたい。メスト、「悲しげに」、「憂鬱な」の言葉は要らない。正に悲しく声は半ばにしか歌いたくない。伴奏の右手のメゾ・スタッカートは大切に守る。左手はあくまでもレガートに歌い、声部の旋律に呼応してデュエットを楽しもう。9小節目からの右手も更に注意深く二つの音をレガートに声部を大事に見守るように弾いて歌を支える。ソット・ボーチェの16分音符の連続は初めは音取りのために遅いテンポで音程を正しく歌う。次の段階で16分音符2箇所ずつを取り出して歌う。次に1拍目と4拍目にアクセントを付けて歌う。この段階まで普通の声のボリュームで歌う。最後に優しい声でコントロール出来るまで練習する。22小節目の高いFis音は横隔膜でよく支えて息がまだ充分ある状態で思いきりよく乗り越えるように歌う。24小節目は高いD音をディミヌエンドしてもとの旋律にもどる予感を与えて、次のC音を少しテヌートしてからアクセントをじわりときかせたB音に流れこむように歌う。終わり前6小節目に高いG音が急に現れる。その直前のブレスの時、瞬時に横隔膜の支えと頭声のポジションが取れるように発声練習の時高いG音だけの声出しをしておくといふ。終わりの高いピアノニッシモのG音は、上記の発声練習の上で成りたつ。この声は長く声を出す間にクレッシェンドされてフォルテにもっていける声であった方がよい。いわゆる裏声は容易に誰にでも出来ることで、この曲の目的ではない。

10 何が始まるのか心はずませる前奏である。軽快にスタッカートを取りEs音F音を高いポジションに当てるように歌う。ニ長調に移ってからもドルチェの指示に従い軽く音階を歌う。重くならないようになめらかな声の響きで中音・高音域をつなぐ。変ホ長調にもどってフォルテでD音を歌う時、音程が上ずらないようにしっかり声を支える。中音域の声は不用意にフォルテで出すと力み過ぎでコントロール出来なくなり音程が高めにきてしまう。この曲は正にそこを指摘す

るかのように強い音でD音をしかも三回も出している。自分でピアノを弾きながら歌い、音程を正しく保ちたい。このD音からの見事な変ホ長調への転調を楽しみながら歌いたい。

11 発想標語を見落としたとしても、4小節の前奏でこの曲の感じが予感出来ねばならない。正にカンタービレと言いたくなる旋律である。しゃれっ気のある半音、装飾音、なだらかな音の流れ、それぞれ気を付けて歌う。また是非とも自分でピアノ伴奏を弾きながら歌うように。転調して行く味わいをピアノと共に感じて曲を楽しめるものにしたい。エスプレッシーボは歌の3小節目から4小節目に移るクレッシェンドまた次のディミヌエンドにも当然な標語となる。H音を中心とする音のエネルギーは、他の楽器の演奏に於いても同様に処理される。フィーネの前4小節はエスプレッシーボとなっている。複付点音符の次の16分音符は歌い易いが油断すると8分音符になってしまう。あくまでも作曲者の意図した軽快な16分音符で歌う。次のエネルギーからは、正に情熱的に力強く歌おう。横隔膜の動きを意識してアクセントをつけて歌う。力を入れ過ぎて声が上ずらないように練習する。終わり10小節は、フレービレ悲しみの声を表しながら静かにコン・ドローレ悲哀を込めた歌声とせねばならない。最後のC音を大事に歌ってはじめての旋律にもどる心の準備をする。

12 まさにスケルツォである。ソアーベメントの息抜き部分は別として。スタッカートが次々に現れるが、息の支えをしっかりと保ってしかし硬くならないで優雅な気分で歌う。オクターブの上下も自信を持ってあざやかに軽く歌う。大事な注意点はスタッカートの直後に横隔膜の動きと共に息を止めるか、または息を少し吸う事である。フェルマータのG音はピアノと指定してある。単なる裏声ではなく正常な発声で歌う。男性は声のひっくり返りまたは咽喉に力の入り過ぎたのど声にならないように慎重に練習する。G音の2拍フェルマータ付きは最初はフォルテで歌い延長しながら声を細める。横隔膜も咽喉も程よく緊張し声は咽喉のやや上方、鼻腔のポイントに声を当てる。忙しくスタッカートを歌い素早くレガートに歌った旋律が終わるとソアーベ快い甘美な調べである。その波にただよう様に歌い今までの疲れをいやし興奮を鎮めつつ再び現れるスケルツォに備える。流すように気楽に歌い咽喉を休ませる大事な箇所である。

13 エネルギッシュにまた充分に自信を持って歌う。1小節目3・4拍目のアクセントは同じ音なので、4拍目のアクセントがはっきりしなくなるおそれがある。3拍目より4拍目をよく注意して横隔膜の動きでアクセントを付ける。3拍目よりも強いアクセントになってはいけないのだが。4小節目はすべての音をはっきり正しく音程を決めて念を押すような歌い方で歌う。曲の後半は大へん難しい。アクセントの連続する箇所は初めはテンポを落として正確に音を取って練習し、徐々にテンポを上げる。また和音を自分でピアノを弾きながら確かめつつ歌わねばならない。終わりのG音は思いきりよくフォルテで出す。横隔膜の支えを充分意識して、頭部のポジションめがけて声を当てるように歌う。ダ・カーポして再びエネルギッシュに歌うのでスタミナ切れを起こさないようにしよう。

14 初めの4小節で曲の活発な感じを掴もう。コン・アニマいきいきした気持ちで歌う。13番まで勉強したテクニックで思い切って歌う。シンコペーションの3小節のところでテンポが早まらないように注意する。曲の中間部では落ち着いたテンポでディミヌエンドしてピアノシモをていねいに保って、半音の下降を上品に処理しながらもとにもどる。ピアノ伴奏がなくなり声だけ

になるので自分の声をよく聞きながら歌う。高い As 音はくり返しフォルテで声を出して咽喉を馴れさせる。横隔膜の支えも必ず意識して練習する。イタリア語でジラーレ（まわす）と言うつまり声の響きを咽喉から鼻腔そして前頭部へと出す要領を忘れないように。あまりにも素直に明るく開放された声ではよくない。鼻腔に響きを通し前頭部に抜けるような気持ちで歌う。デチーソからは決断力をもって 16 分音符を次々に歌わねばならない。適度に緊張した声で勇気ある歌い方で歌う。最後の 6 小節は決断力とやさしさを上手に歌う。

15 初めの部分は伴奏をなめらかに弾く。このピアノの音の流れにそっと乗って歌う。中位の音域で歌うので出だしは歌い易い。旋律は正になだらかでおだやかに歌える。8 小節過ぎると伴奏の型も変わり決然と和音を刻む。歌はその音に乗り元気よく上昇し As 音を征服する。16 分音符の連続の中に半音階が現れるが音程を正しく取ってあいまいな音にならないようにする。曲の中間部で初めの旋律にもどる前の小節は、ていねいに音を取りながらもとの旋律にもう直ぐかえるのだという予感を大事にしながら歌う。オペラアリアでもこのような部分は、また主題が現れると言う期待感で聴く者の気持ちを歌にひきつける。つなぎの部分と思ってもやはりていねいに歌う。テンポ・プリモからまたおだやかさを取りもどし柔らかに歌う。終わりにある長い As 音は高い方の音を歌う場合、初めはフォルテで練習し次にメゾ・フォルテで更にディミヌエンドをかけてと練習を工夫する。声をよく支えられるようになったら最後にピアノッシモで練習する。

16 パストラレ牧歌的とある。ドルチェでのどかな気分で歌う。歌の 2 小節目にブレス記号があるが、曲を数回練習した後ではブレスなしで 4 小節を歌う。次の 4 小節も同様に練習して長い息に耐えられるようにする。9・10 小節 4 拍目の E 音はアクセントが付いているが胸声が強過ぎないように。13・14 小節目も同様に注意する。ドルチェ・ソアーベからは音の高低がはなはだしいので、声のコントロールに気を付ける。初めはゆっくり音を取り後テンポを上げて歌い、また 8 分の 6 拍子のリズム感を大事に。長調の終わり 6 小節分はピアノッシモなので細心の注意を払ってアクセントも控え目に付けて歌う。最後から 2 小節目と 3 小節目の間にブレスを入れて練習してもよい。特に男性は多く練習してきれいな A 音を出せるようにする。短調に入り歌の旋律は Cis 音だけで延ばすが、伴奏音は多くの音を出しているの、その音をよく聴きながら歌う。

17 伴奏が 1 小節の後歌は D 音から始まる。和音に含まれない音なのでよく注意して音程を正確に歌う。歌の 4 小節目や 12 小節目のオクターブ下降した D 音は地声にならないようにほどほどにアクセントを付ける。25 小節目から 6 小節分の 16 分音符はよく伴奏音と重ねてリズムが一致するように、またなめらかに歌う。グラツィオーソ優雅にからは正に楽しんでなめらかに歌い流れて行く感じに歌いたい。終わりから 6 小節目、8 小節目の Gis 音は不正確になりやすいので注意する。

18 正しく楽しく歌えるとよい。例えば 7 小節目のアクセントは無意識のうちに横隔膜の支えを使っているか。15 小節目の下降する 16 分音符が楽しく歌えるか。21・22 小節目のシンコペーション、3 連符がおもしろいと感じるか。曲の後半からは伴奏の右手に実に甘い旋律が流れる。これを聴きながら助奏として歌をはさみこむように歌おう。フェルマータの前 4 小節はピアノが歌い歌が歌いと、自分でピアノを弾きながらお互いの旋律を楽しみながら歌うとよい。

19 伴奏はソット・ボーチェで大へんレガートに弾いて歌をそっと運んでやると言うつもりで弾く。左手のアクセントは柔かく付けて、3拍目から始まる歌の支えとしなければならない。このアクセントによって3拍目から始まる曲であることを自覚させられるしまた少しの勇気を与え、歌いやすくしてやれるのである。歌声はあくまでもドルチェである。1小節目、10小節目と二回も指示されている。復縦線からはコン・アニマなのでよりはっきりした歌い方に変える。リゾルトのところはフォルテで思い切りよく歌う。ドルチッシモからは初めよりもっと柔らかな声にして歌う。ポコ・リテヌートの部分は一音ずつはっきり落ち着いて歌い、ピアノ伴奏は歌につれて少しゆっくり弾く。ア・テンポの5拍伸ばすE音は、徐々に声を細めてわずかのポルタメントでなめらかにすべるようにH音に降りまた初めの旋律にもどる。終わりから4小節目の下のA音にドルチェと指示があるのを見落とさないように、これは急に低い声を出さねばならないので、艶のない声になったり、胸に入った地声或は力み過ぎにならないように注意を促していると思われる。フレーズはそれを更にディミヌエンドしてピアニッシモで終わる。終わりの高いA音はピアニッシモで何回も練習する。

20 正にレントでゆっくりゆったり歌わねばならない。初めからエスプレッシーボで表情豊かに歌い始め2小節目は当然ディミヌエンドしてこのフレーズをひとまずおさめ、続く2小節をソアーベ快い感じに歌ってこの4小節を一区切りとして歌う。次の4小節目のFis音以下3拍目迄の16分音符は、音程が少し取りにくいので注意する。グラツィオーソに入ってからアクセントは強過ぎないように。コン・アバンドーノは自由な感じで少しテンポがゆるくなってもよいと思って歌う。次の小節の3連符の直前のB音は3連符の最初のB音と区別した歌い方つまり二度目のB音に少しアクセントを付けて歌う。曲の半ばからまた初めの旋律にもどるが、その前のEs音、E音はラレントでゆっくりなめらかに上昇してF音にまさによろやく辿り着くという感じに歌う。これから2小節過ぎたら次々にこまかい音の動きが現れる。32分音符の動きをよくコントロールして歌えるように部分練習をする。終わり4小節は静かにおだやかに気持ちを落ち着かせ鎮めるように歌いおさめる。終わりのB音は高い方の音をファルセットで歌う。

21 4拍目から始まるので歌い出しを間違わないように伴奏を初めからよく聴いておく。歌は初めからコン・エネルギーで元気よく歌う。付点音符の次の16分音符は、ピアノ伴奏の3連符の3拍目と同じになってしまわないように機敏に処理する。9小節目3拍目でピアノがF音を出したらテヌートされた事を確認してからもとの旋律を歌い始める。あわてて飛び出すように歌い始めるのはよくない。アラルガンドでゆったりした歌い方で前半を終わる。後半は次々に転調するので是非とも自分でピアノ伴奏を弾きながら勉強したい。ポコ・リテヌートのところは音程も音の動きも難しいので、ゆっくりあわてないで歌う。フェルマータの後はりゾルト決然と歌い出しエネルギー感を出す。転調するピアノの音を聴きながら歌う。

22 8分の6拍子の5拍目から曲は作られている。4拍目の音をよくとらえて歌い出す。伴奏を弾きながら歌うとよい。1拍目にアクセントが付けてある。フレーズを誤解しないように、G音のオクターブ上昇は横隔膜の支えを大事に上手に歌いこなせるように。18小節目からの半音の上昇は伴奏音をよく聴いて歌う。D音のアクセントの連続はフォルテで息をよく支えてまた声が上ずらないように歌う。28小節目からの16分音符と半音階は声のコントロールがうまく出来るように遅く歌ったり、他のいろいろな母音で歌ったりしよう。ハ長調になってからピアノの左手の音が

面白い。自分で弾きながら歌いピアノと歌の旋律の対比を楽しみたい。この8小節を繰り返す時二度目はピアノニッシモで歌う。転調は全てピアノで和音が示されるので弾きながら歌って練習する。ダ・カーポがあるのでスタミナを保持して歌う。

23 センティメント感情、情緒と訳すが感情豊かにである。そういう気持ちで柔和に歌う指示である。初めの前奏からピアノは柔らかい和音の連続音を響かせる。スタッカート気味の荒い弾き方はよくない。柔らかな音の上に歌をそっと乗せるように歌い出す。E音のアクセントは柔らかく付ける。拍の前半の音にアクセントが付いているのは、基本的な音の演奏法を示す。歌の旋律も同じである。8小節のB音は繰り返した二回目の時は4拍目に1拍分のB音を歌って次の小節に進む。13小節目はテンポを少し自由に考えてG音を大事に声の出具合いで伴奏は歌について行くように弾く。15小節目の16分音符の連続下降は、音が連続上昇する時より不正確になりやすい音がすべりやすいところなので注意する。36小節目からト長調になるので35小節目の終わりのFis音から移動ドのト長調で歌う。これも必ずピアノを自分で弾きながら歌う。ソアーベメントだからさわやかになめらかに歌う。ピアノニッシモのところは咽喉をしめつけないで歌えるようにしっかり声を支えて歌う。終わり4小節分は伴奏がないので音高が狂わないように。最後のG音を歌ったら直ちにピアノでG音を弾いて正しい音かどうか確かめよう。同じ音型を強くしたり弱くしたりして歌うので大へん勉強になるところである。

24 変奏曲である。テーマを柔らかく歌う。3小節目からのEs音を3回連続してアクセントを付けるが柔らかいアクセントで回を重ねる毎に少しずつ強くして歌う。7小節目のEs音もアクセントを正しく付ける。4分音符2箇が2分音符1箇の歌い方にならないように注意する。フェルマータの前のナチュラルのD音は3拍目に付いている装飾音と共に音高に気を付ける。ピアノ伴奏の左手にD音が出ているのでよく聴きながら歌うとよい。

変奏Iは拍の後半から歌い出す練習である。よくピアノ伴奏を聴きながらタイミングよく歌い出さねばならない。休符が多いがその為にフレーズ感が失われないように。またリズム感をよりよく出して歌う。4小節目の3拍目は少し難しい。1拍目・2拍目は同じ音型で歌う声のポジションもやや高めで歌い易いが3拍目になると急に中音域に下降する。ここで声のポジションを素早く変える要領を覚える。3拍目のC音As音が狂い易いので、初めはゆっくり練習したり、またいろいろな母音で練習する。8小節目と終わりの小節は同じ音型の16分音符の連続で難しいので多く練習する。

変奏IIは1拍目から16分音符の連なりであるが、このフレーズを出だしから軽やかに歌いたい。デクレッシェンドの指示があるがこれは上昇するにつれ軽やかにとまって歌う。2小節目の16分音符のG音F音はコントロールしにくいので注意しながら歌う。3小節目のEs音のスタッカートは直後に息を吸って次のアクセントの付いた同じ音を歌う。確実に声を切って歌わねばならない。8小節目の1拍目のEs音は息の支えと共にフォルテで出すが2拍目の高いAs音は弱く透明な感じに声を短く歌う。基本的な演奏法がアクセントによって示されている。終わりから3・4小節目のシンコペーションにもアクセント記号が付いている。基本的な事なので大事に守って歌う。終わりから2小節目は16分音符の連なりの拍の頭にアクセントが付いているので歌い易い。思い切りよくフォルテで歌おう。

25 この曲集の最後の曲である。自信を持って3連符の伴奏に乗って情熱的に歌う。基本的な事

だが1小節目の4拍目と2小節目1拍目は同じ音であるが後者の方にアクセントがある。また3小節目3拍目から同じ音が3つ続いて出るが4小節目の1拍目に向かってクレッシェンドする。また5小節目4拍目と6小節目1拍目も同じ音だが後者にアクセントがある。このように指示されている事を見逃さないように。7小節目の3連符の連続はピアノ伴奏とよく合うように。10小節目から12小節目までの3連符の連続は高いポジションから徐々に下降してくる声のコントロールを上手に。15小節目はやや自由にテンポを取る。ポルタンドはスタッカートとレガートの中間の奏法歌い方でひとつひとつの音を柔らかく区切る。上品な歌い方になるように注意する。アクセントが7音続けて付いている小節は、前半をエネルギッシュに後半は柔らかく歌う。アクセントは柔軟な声で歌う。あまりごつごつした感じは曲に合わない。同じ旋律をピアノやピアノニッシモで歌うところも慎重に。終わりの6小節は情熱を鎮めるように歌う。

おわりに

歌は毎日の修練である。発声とこの曲集のどれかを選んで練習する。曲集を歌い終わってもまたいつでもふり返ってどの曲かを歌って声の技術を磨いてもらいたい。

参考文献

- 1) コンコーネ 25番, 中声用, 城多又兵衛解説, 音楽之友社, 1959.
- 2) コンコーネ 25番, 中声用, 畑中良輔, 全音楽譜出版社, 1964.